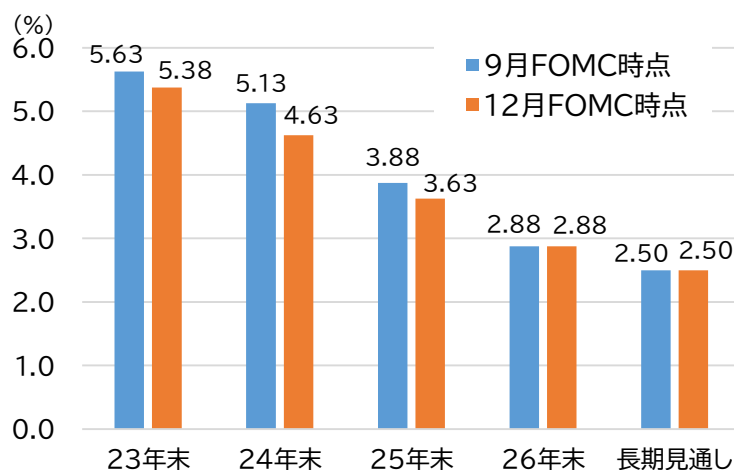


■注目のFOMCはハト派的な内容に

FRB(米連邦準備制度理事会)は12~13日にFOMC(米連邦公開市場委員会)を開催し、政策金利を3会合連続で据え置くことを決定しました。同時に発表したFOMC参加者による政策金利見通しでは、2024年末の水準が4.50~4.75%と、来年末までに合計0.75%の利下げを見込む内容となり、9月時点の予測よりも想定利下げ幅が拡大しました(図表①)。

会合後の記者会見でパウエルFRB議長は、データ次第で追加利上げを行う可能性を残した一方、今回の会合で今後の利下げについて議論が行われたことを明らかにしました。今回のFOMCは総じてハト派的な内容であったと言えます。

図表①: FOMC参加者による政策金利見通し(中央値)



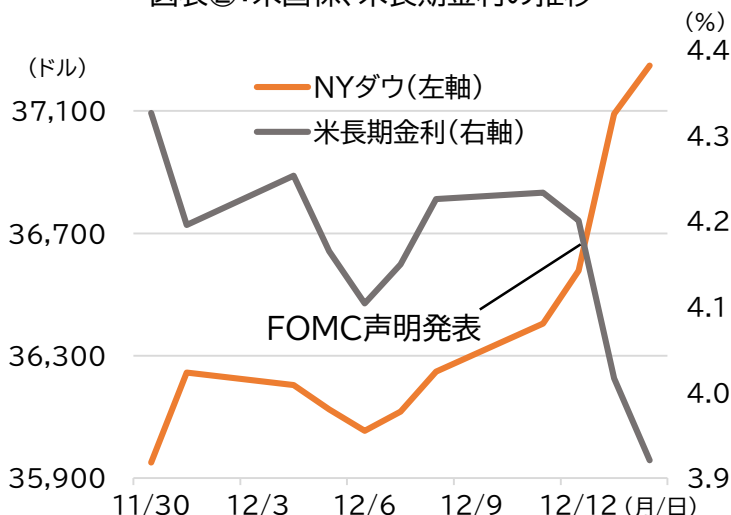
※ 12月FOMC時点の23年末は実績値
(出所) Bloombergよりいちよしアセットマネジメント作成

■FOMCの結果を受け米国市場はリスクオンで反応

FOMCの結果を受け、米国市場はリスクオンで反応しました(図表②)。債券市場では、米10年国債利回り(長期金利)が12日終値の4.20%から大幅に低下し、14日には3.92%と今年8月以来の低水準を付けました。

また、金融引き締め長期化による景気後退懸念が和らいだことから、主要株価指数も上昇しました。14日には、ダウ工業株30種平均が2022年1月以来となる史上最高値を更新したほか、S&P500種株価指数、ナスダック総合株価指数も年初来高値を更新し取引を終了しました。

図表②: 米国株、米長期金利の推移



※ 期間は2023年11月末~2023年12月14日
(出所) Bloombergよりいちよしアセットマネジメント作成

■米金利低下により今後はグロース株優位の展開か

日本株市場においては、今年1年相場をけん引してきたバリュー株から、米長期金利の低下を背景としたグロース株優位の相場へと、物色の対象が変化する展開が想定されます。図表③は、東証グロース250指数(旧東証マザーズ指数)と米長期金利の推移になります。東証グロース250指数は、米長期金利と反対の値動きをする傾向にあるということがお分かりいただけたと思います。

18~19日に開催される日銀金融政策決定会合を前に、マイナス金利解除の思惑から東証グロース250指数は足元軟調に推移していますが、中期的には米長期金利の低下基調を背景に同指数の反発が期待出来ると考えられます。

図表③: 東証グロース250指数と米長期金利の推移



※ 期間は2022年10月末~2023年12月14日
(出所) Bloombergよりいちよしアセットマネジメント作成